

〈 水 稻 〉

○適正な乾燥

- ・水分測定は、乾燥前、中、後のそれぞれの工程の中で正確に行います。
- ・籾が高水分の場合や水分ムラがある場合は、籾含水率が20～18%まで低下した時点で乾燥機を一時休止し、籾全体の水分の均一化を図ってから仕上げ乾燥する二段乾燥を実施します。
- ・乾燥の仕上がりは、玄米水分15%を目安とします。
- ・過乾燥は胴割粒を発生させるとともに、食味低下の要因となりますので、乾燥機の温度設定は停止水分をやや高めに設定して一時停止し、過乾燥を防止します。また、タイマー乾燥の場合は、設定時間をやや短めにして過乾燥を防止します。

○調製作業〔籾摺り・米選〕

- ・籾摺り作業は、穀温が高いと肌ズレ米が発生しやすいので、穀温が常温まで低下してから行います。
- ・ゴムロールの摩耗点検は必ず行い、試し摺りを行って脱ぶ率が80～85%になるよう調節します。また、全自動のものについても必ず摩耗点検を行います。
- ・籾摺機の処理量は米選機の処理量に合わせて流量を調整します。
- ・米選機の網目は1.9mmを基準とし、整粒歩合80%以上を確保します。

〈 大 豆 〉

○適期の収穫

- ・水稻や麦に比べて、コンバイン操作の技術差が出やすいことから、導入したコンバインの操作に習熟する必要があります。
- ・収穫時期は、汚粒の発生を防ぐため、子実水分が18%以下、茎水分が50%以下（できれば40%以下）になった頃が目安となります。なお、収穫時にコンバインの後ろからほこりが立ち上がるようであれば汚粒の心配がありません。
- ・雑草による汚粒発生を防ぐため、収穫前にタデ類やアメリカセンダングサ等の大型雑草を除去します。
- ・収穫時は、グレンタンク内をチェックし、割れ粒など損傷粒が多い場合はこき胴の回転数を下げて損傷粒の発生を防ぎます。

○乾燥・調製

- ・乾燥前の子実水分と乾燥条件により、しわ粒や裂皮粒等が発生し、品質が低下する場合がありますので注意します。
- ・乾燥は、送風温度が30℃以下、送風温度が室内温度よりも15℃以上高くないように留意し、子実水分を15%に仕上げます。乾燥前の子実水分が18%を超えていると、通風条件が悪い場合に蒸れを生じる危険があるため、通風温度が20℃以上にならないよう注意が必要です。
- ・仕上げ乾燥後、選別機で夾雑物や被害粒等を除去し、整粒歩合の高い高品質な大豆に仕上げます。粒径選別に用いる篩い目は、大粒は7.9mm、中粒は7.3mm、極小粒は4.9mmを使用します。

- ・汚損粒が発生した場合は、大豆クリーナーを使用して品質向上を図ります。調製後は、^{ねずみ}鼠や貯穀害虫の被害、高温による品質低下を発生させないよう保管します。

〈 野 菜 〉

○ネギ

- ・秋冬ネギの収穫期を迎えます。出荷基準に達したら、調製作業の労力に応じて計画的に収穫作業を行います。品質保持のため、掘り取りは土壌水分が低くなってから行うようにし、皮むき時に軟白部へ土砂が付着しないようにします。
- ・葉の損傷や収穫後の曲がり避けるため、運搬、保管時は立てておきます。収穫後に伸長した部分は、淡い緑色になり外観を損ねるので、収穫、調製、出荷作業は気温の状況を見ながら2～5日程度で終えるようにします。
- ・今年度はネギアザミウマの発生が多い傾向にありますので、ダントツ水溶剤やディアナSCなどにより防除します。発生が多いほ場では、異なる系統の薬剤を7～10日間隔で薬剤を散布し、発生密度の低減を図ります。また展着剤を必ず加用し、葉先から株元まで薬液が十分付着するように畝の両側から丁寧に散布します。薬剤を選定する際は収穫前日数を確認のうえ、適正に使用します。
- ・9月以降、さび病の発生が増加傾向にあります。発病が多くなってからの防除は効果が劣るので、発病前からの予防防除に努めるとともに、発病を確認したら、治療効果のあるアミスター20フロアブルやオンリーワンフロアブル等を散布します。アミスター20フロアブルは近接散布するとネギを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とし、収穫前日数を確認のうえ、適正に使用します。

○アスパラガス

- ・10月は来年の春どり収量に影響を与える、株への養分蓄積が行われる大事な時期です。
- ・現在は茎葉からの根への養分転流、蓄積に向かう時期となっていますが、7月中旬頃からは斑点病などの病害の発生が目立っています。茎葉の養分をスムーズに根へ転流させるには茎葉を健全に保つことが重要なので、薬剤散布を行います。
- ・雑草の多い状態で越冬させると次年度の発生量が増加しやすいので、早めに除草します。除草剤を使用する場合は、収穫打ち切り後でなるべく気温が高く効果が期待できるうちに散布します。茎葉処理剤はアスパラガスに直接かからないよう注意します。
- ・茎葉の刈り取りは、立茎後（株養成開始後）50日程度経過し、茎葉が黄変した頃で、例年11月中旬頃に作業します。刈り取り時期が早すぎると貯蔵養分が不足し、次年度の春どり収量が低下するので、茎葉の緑色が残っているうちは刈り取りを行わないようにします。

○ホウレンソウ

- ・寒締めホウレンソウの播種期を迎えます。単価の高い1月から2月上旬の収穫を目標に、今月上旬～中旬に播種を行います。播種時期が遅くなる場合は、低温伸長性の良い品種を用います。
- ・ホウレンソウは、気温が5℃以下になると生育が停滞します。12月以降はほとんど生育が進まないため、11月末までに20cm程度の草丈を確保できるよう管理することがポイントです。播種時期が遅れた場合や、10、11月に気温が低く生育が進まない場合は、べたがけ資材を使って保温しま

- す。逆に、秋期が温暖で生育が進み過ぎる場合は、ハウスの換気を行って生育を抑えます。
- ・秋期のハウス内は、べと病が発生しやすい環境条件になります。抵抗性品種を利用するほか、播種後はかん水を控えたり、ハウス内が過湿にならないよう換気を行うなどの対策が重要です。
 - ・ハウレンソウケナゴコナダニの被害が発生しやすい時期です。被害が拡大する懸念があるので、初殻や稲わら、未熟堆肥など腐熟が不十分な有機物資材は使用しないようにします。

〈 果 樹 〉

○果樹の生育状況

りんごや日本なしの果実肥大は、平年並～やや大きい状況となっております。

表 果樹の肥大状況（9月16日現在）

単位：cm

樹種	地域	品種	縦経	横径
りんご	鹿角市	ふじ	7.81(102)	8.36(101)
	横手市	ふじ	7.42(98)	8.39(99)
なし	潟上市	豊水	8.54(109)	9.74(109)

※果樹試験場本場、天王分場・かづの果樹センター調査

() 内は平年比(%)

○りんご中生種の収穫と留意点

- ・本年は果実の熟度はやや進んでおり、中生種の「やたか」などの収穫開始は平年よりやや早いと予想されています。
- ・樹勢の強弱や樹冠の上下、内外で果実の熟度に差がありますので、1樹を2～3回に分けて適熟果を収穫します。

○「ふじ」の着色管理

- ・早い時期に、強い葉摘みを行うと食味や着色の不良を招きやすいので、10月上旬頃までの葉摘みは、果実を覆っている葉を取る程度にします。
- ・10月10日以降は、果実周辺の果そう葉や新梢葉^{しょう}をやや強めに取り、光が果実に直接当たるようにします。なお、葉摘みとともに玉回しも行い果実全面が着色するように努めます。

○西洋なしの収穫と留意点

- ・本年の県南・中央部の収穫期は、「ラ・フランス」、「シルバーベル」とともに、やや早まると予想されるので、収穫適期を逃さないように注意します。
- ・西洋なしの追熟は、常温よりやや低い温度で、温度変化が少なく、通風の少ない部屋が向いています。このような部屋で予冷をしないで追熟した場合、追熟日数は「ラ・フランス」で3～4週間、「シルバーベル」で6週間弱です。

○日本なし晩生種の収穫と留意点

- ・日本なしの収穫は、地色や食味（硬さ、酸抜けなど）を確認しながら行います。特に「南水」は、収穫が遅れると果肉の軟化が早いので、収穫時期を見極め、遅れずに収穫します。

○台風対策

- ・台風情報に十分に留意し、襲来が予測された場合は、収穫販売可能な果実を事前に収穫します。また、支柱や結束の点検と見直し、補強を行い、枝折れ等を防ぎます。

〈花き〉

○ストック

- ・ストックは葉の枚数が多く茎葉が重いので、フラワーネットの張り不足や、ネット上げの遅れが曲がりの原因になります。ネットは常に地面から草丈の3分の2の高さになるようにします。また、ネット上げを無理矢理行くと、茎葉に傷がついたり葉の脱落を招くので、優しく丁寧に行います。
- ・茎葉や花穂のしっかりと詰まったストックに仕上げるため、最低気温が8℃以下になるまでは、夜間でもハウスサイドを開放し、換気に努めます。
- ・収穫は、小花が7～8輪開花した頃に行います。採花後、横にしておくと曲がるため、水揚げはゴザ等で押さえながら、まっすぐ立てた状態で行います。
- ・気温が下がってくるとコナガやヨトウガ、アオムシなどの被害は少なくなりますが、油断せず、ほ場を良く観察し適切に防除します。また、ハウス内を飛んでいる成虫を捕殺することも大切です。

○キク

- ・来年に向けて良質の苗を確保するため、10月中に親株の伏込を行います。
- ・伏込用ハウスには、a 当たり、完熟堆肥を300kg、チッソ、リンサン、カリの各成分をそれぞれ0.6 kg施します。
- ・切り下株を利用する場合はa 当たり約200株、冬至芽利用の場合は約700本必要です。植え付け間隔は切り下株で10cm×10cm、冬至芽は5 cm×10cmを基本とします。
- ・伏込後は十分かん水します。温度を確保するため、ハウス内にトンネルを設置し、活着まで10℃、活着後は5℃で管理します。
- ・切り下株や冬至芽利用のほかに、かぎ芽挿しによる方法も有効です。この方法は、小面積で挿し穂が確保でき、穂の揃いも良くなりますが、作業が遅れると芽の吹きが悪く、翌年の採穂数が少なくなるため、早めに実施します。

○リンドウ

- ・収穫後の管理が翌年の生育・品質に大きく影響することから、収穫を終えて養成のために残した株は花摘みを実施するほか、収穫後も定期防除に努めます。
- ・茎葉が完全に枯れ込んだのを確認してから地上部を刈り取ります。早い時期からの刈取は株を傷めることになるので、晩生品種のように枯込が遅い品種は注意し、場合によっては翌春行います。刈り取った茎葉は病害虫感染防止のため、必ずほ場外に持ち出し、処分します。
- ・すでに翌年収穫となる芽が確認できます。栽培年数が経過すると株や芽が地表面から高く浮き上がり、株を消耗させますので、培土等で土寄せを行って株の消耗を防ぎます。

○ダリア

- ・先月に引き続き収穫期となります。
- ・花に水分を含んだ状態での採花及び梱包^{こんぼう}は極力避けます。露地栽培でどうしても降雨後の採花となる場合は、採花後、乾燥したところで水揚げを行い、花卉の水分を十分に飛ばします。
- ・水分を含んだ状態^{こんぼう}で梱包すると、花シミや花卉の垂れ等の事故につながるため注意します。
- ・中大輪以上の品種では、採花時のスレ等で花卉が痛みやすいため、丁寧に扱います。

○台風対策

- ・台風被害が懸念される場合は、あらかじめパイプハウスの補強、押さえバンド、妻面などの確認を行います。飛散物による被害も懸念されるため、施設周辺の清掃や整理整頓も重要です。パイプハウスの倒壊が懸念される場合は、事前にビニールを撤去してパイプの破損を回避します。

〈 畜 産 〉

○牧草の刈り取り危険帯

- ・牧草は越冬のための養分を蓄える期間「刈り取り危険帯」があります。この期間に刈り取りを行うと、貯蔵養分不足で冬を迎えるため、凍害や雪腐病による被害を受けやすくなり、翌年の1番草の収量低下につながります。
- ・「刈り取り危険帯」は、日平均気温が15℃以下になると株や根に栄養を貯蔵しはじめ、さらに平均気温が5℃以下になると牧草は生育を停止します。この間のおよそ40日間です。県内で日平均気温が15℃以下になるのは、平年で北秋田市では10月初め、秋田市では10月中旬、横手市では10月上旬になります。
- ・3番草等の秋の刈り取りは、この「刈り取り危険帯」の前に終えるようにします。また、掃除刈りを行う場合は、牧草の養分蓄積が終えた後とするようにします。

○草地の雑草対策

- ・ギシギシやヨモギ等は10月上旬頃の雑草展葉期にアージラン液剤による防除も効果的です。除草剤使用後14日間は、放牧や採草等の利用ができませんので注意します。

○稲わら収集

- ・コンバイン収穫後の稲わら収集にあたっては、2～3回の反転乾燥を行い、十分乾燥したものを梱包^{こんぼう}・収納します。
- ・水分が30～40%の状態^{こんぼう}で梱包すると、内部が熱を持ち黒く炭化したり、まれに自然発火することがありますので、水分が多めの場合は格納前にハウス等を利用して水分を飛ばしてから格納するようにします。

(お問い合わせ先)

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL : 018-860-1801 FAX : 018-860-3822

E-mail : engei@pref.akita.lg.jp